

# 國語と日本精神

岡田 希雄

## (一) 序 説

人類や、其の人類の語す言語の起原が、一元であつたか、多元であつたかは、大きな問題として、永久に解決は出来なからうが、よしや一元であつたに於て、現在の現實の事實として言へば、人類は先づ數種に別れ、其れが更に多種多様の民族に分岐し、其の民族は又多數の部族に別れて居ると云ふことに成つてゐる。同時に言語も亦、多種多様に發達し分岐して、構成上から言へば、膠着語(附着語)、列位語(孤立語)、屈折語、抱合語(Incorporating language)、その一層甚しい多綜合語(緝合語 Dasythyetic L.)などの五種族に別れ、系統的に分類すれば、ウラル・アルタイ語族、インド・ゼルマン語族等の八大語族に別れ、其れが更に細分せられて多くの民族語と成り、民族語は又大ていは更に細別する事も出来る。(此の細別は文化國にては方言的相異と云ふ可く、臺灣の生蕃の如き未開族の間では、それを部族語と云ひ得るのであらう)斯くて大體に於いて、或る民族の語る民族語は、他の民族の語す言葉と異なるものが發達するに至り、これが政治的背景を持つと、其れ々の國家の國語となり、國語と民族・民族語との關係は、單純なものも複雑なものも出来るに至つた。そして多種多様の民族の發生は、全く地理的事情に支配せられ

たからであり、彼等民族が獨自の民族語を有するに至つたのは、其の民族の考へ方、好惡と言ふやうなもの、即ち其の民族の性狀・心理狀態、所謂民族性なるものが、其れゝゝ相異して居り、其れが言語に反映するが爲め、と言はれて居る。此の説はやゝもすると、民族が先づ存して然る後に民族語が発生し發達したかの如くに、解釋せられやすいが、無論然らざる意味に解釋すべきではない。

民族より、も一つ大きい單位の人類團體から、1234等の個々の民族が次第に分岐形成せられ行くに當り、彼等の言語も亦祖語とも云ふ可きものが方言的に1234等に分岐發達し、然うして、やゝちがふ所の言語を使用するものは、お互ひに言語がやゝ違ふと言ふ事の意識から、所謂排他的な「よそ者」意識を強め行き、それゝゝの分離は漸が深く成り、體質的にも精神的にも次第に差異が大きく成つて行き、こゝに個々の民族の成立、民族語の成立と成つたものと解釋すべきである。つまり民族及び民族語の成立の事情は、お互ひが影響し合つて今日に至つたものであらう。がともかくも一つの民族語は、其の民族語を語る民族の社會意識が發達せしめたのであるから、彼れらの全生活の社會的、團體的產物であり、殊に精神生活の反映であると見なさねばならぬ。従つて逆に言へば、一つの民族の言語に現れたるものを檢して、其の民族の現在に於ける物質生活、精神生活を、或る程度まで伺ひ得る譯であり、同時に遠い過去の生活をもかなりの程度に於いて伺ひ得る譯である。日本語に於いても亦然うである。日本人の精神生活は——物質生活の事は今は問題とするので無いから省略する——日本語によりて伺はれるのみである。尤も日本人と一口に言ふものゝ、其の成立を考へて見れば、日本人は決して單純な人間で無く、多種多様の血の混血により現在の日本人と言ふ融合體が出来たのであるから、日本語について單純に考へる事、従つて日本語に現はれた民族性について、單

純な考へ方をする事は、宜しくないと云ふ論も生ずるだらうが、しかし現在の日本語は被征服者の言語の系統のものでは無く、征服者たる優秀な天孫族（彼等については南方系説もあるが、自分は北方系説を信じて居る）の言語の繼承であり、天孫族の支配下に屬し、天孫族語を話す言語團體に加入した他民族（異民族）の言語は、單語ぐらゐは天孫族語に提供する事はあつたにしても、大きな影響を與へるに及ばず、彼らは固有の言語を忘れて天孫族の言語に同化せられ、天孫族の言語を使用する事によりて精神的にも天孫族化し（同時に混血による同化もあつた筈である）、天孫族の精神を移植せられ、もとは異民族であつたにしても、其れを全然忘れ、皆が天孫族であるとの信念を得て、今日に至つて居るのであるから、自分は日本語にあらはれたところを以て、日本人の民族性を考へても何ら支障がないと信じるのである。

しかしして現にさう言ふ微妙な考慮は露拂ふ事無くして、大膽に日本語と其れに現はれた民族性とを説くのが常である。しかして是れは方法論としては強ち咎む可きでは無からう。

ところで現在で言へば、日本語は日本民族の民族語であると同時に、日本帝國人の國語である。（否われ／＼の信念から言へば、學術的には證明できなくても、悠久の太古から天孫族國家の國語であつたと言ひたいのである。）従うて日本語と日本民族性と言ふ事は、國語と國民性と言ふ事である。しかして國民性・民族性と言ふと、甚だ廣範圍にわたる事柄である。だが、自分は今、國語に現はれた日本精神と言ふやうなものについて考へたいのである。ところで現在の用法では「日本精神」と言ふ語は、日本民族性の中でも、讚美する價值ある優秀なものの意味で使用せられて居るやうだから、自分も亦其の用法に従ふ事とした。従うて「國語に現はれた國民性」と言ふやうな論文で取り扱ふもの

よりは、「國語と日本精神」と言ふ題で取り扱ふ事項の方が、内容は遙かに制限せられる譯である。故に日本語の音韻・單語・語法と言ふやうな方面に關した事、又同音異義の語の使用の多い事によりて、國民が輕快な洒脫な感情を有して居ると言ふ類の事など——これらは「國語と國民性」と言ふ類の論文では取扱はれて居る事である——は全部問題外の事とした。同時に又金澤博士の名著「言語に映じたる原人の思想」の如き記述の態度を取る事もせなかつたのである。

ところで國民の性狀も時代によりて變遷するものなる事を考へねばならぬ。それと同様に、國語にも長い歴史があり、時代の變遷があるのだから、國語に現はれた國民性もやはり又、大なり小なりに變遷する事を認めねばならぬ。故に國語に現はれた日本精神なるものも、やはり或る種の程度の變遷を認めなければならぬ。それで結局は、日本語を通じて終始一貫して存する本質的のものとか、又は今は稀薄に成り或ひは又は消滅するに至つて居るにしても、古代に存し、固有の思想であつたと考へられるやうなものを注意すべきであらう。(但しこれは日本固有の精神を考へる場合には、いつも注意せねばならぬ事である。)

さて然うして見ると、國語と日本精神と言ふやうな題で物すべき事項は、極めて乏しく成るので——これが文學に現はれた日本精神と言ふのであるならば、豊富であり得るが、今は「國語に現はれたる」であり、文學とは無關係である——自分は單に二つの事項だけを取り上げて記して見る事とした。即ち一つは古代日本人が有して居た國語に對する考へが積極的に現はれたものとしての言語信仰(但しこれは後世では殆んど影をかくしたと言はねばならぬ)であり一つは文獻に現はれた古代國語より現代の國語に至るまでに、程度の差こそはあれ、必ず存して居り、しかも

の最大の特徴とも言ふ可き敬語に現はれた日本人の、秩序を尊びお互ひに推譲すると言ふ美はしき精神についてである。先づ後者に就いて述べる事とする。

## (二) 敬語と日本精神

國語に現はれた日本精神として、最も注意すべきは、敬語を發達せしめた日本民族の推譲の精神であると信する。敬語とは云ふまでもなく、自らは謙讓し、他を敬ふと云ふ意志を表示する國語の一形式であつて、精しく云へば、○第三者としての、又は話相手としての尊位のもの（社會的尊位の人もあれば、肉親的尊位のものもある。人以外の神佛、又其れに準ず可き迷信的對象もある）、又話の相手となる人に關する動作・狀態・事物について尊敬の意を示す。

○自己に關する事物・動作・狀態（例、自分の肉親の事を人々にのべる時の如し）に關し、卑下謙遜の意を示す。二種の場合があり、敬意謙意を表現するには、本來敬意を有する單語、本來謙讓の意を示す單語、種々の接頭辭、接尾辭、元來は敬意も持たぬ單語などの集合體により表現せられる。

元來が對人關係に上臺を有するものであるから、現在の口語に就いて云へば、社交語たる日常口語對話に於いて優勢であり（小説などの中の對話文、口語體の手紙文なども、右に準すべきである）、次ぎには、やはり受け取る可き特定の相手のある候文體の書簡文（候文體は必ずしも書簡文にのみ使用せられて居るとは限らぬが、現在では先づ書翰文用と云ふ可からず、布告書の類が、候文體を取るのも、相手を想像するからであり、やはり書簡文に準すべきで

ある)には、口語會話のものに比べるとかなり趣きの異なる敬語が使用せられ、所謂言文一致體(但しこれも「ありません」「です」「ました」「ます」體のものは別である)の地の文や、所語文語體文の地の文、會話の文では、敬語の使用は殆んど無くて、過去現在を通じて皇室皇族に關する敬語が存するに過ぎない位であり、漢文調の濃厚な文に至りては、其れさへ乏しい有様と成つて居る。

口語の會話に於いて、何故敬語が多く使用せられるかと云ふに、これは敬語の本質上然うなつたのである。現在のわれわれは封建制度の社會の人間で無く、其れのみならず、西洋の個人主義的思潮の優勢に成り、且つ自由主義とか民主主義とか、社會主義とかの唱導せられる現在の社會に住む人間として、自由平等の思想の感化を、積極的にも消極的にも受けて居り、且又人間本然の性質として、人々各自矜持を有し、自らを敬ひ重んじ、猥りに卑屈にふるまふ事は無いが、同時に社會の一員としては、~~いかに~~相手に相手を重んじ、自ら謙遜すると云ふ推讓の精神を有して居る。そしてその推讓の精神は、動作に現はれては禮儀作法とも成るが、云ふまでもなく、一番よく言語、それも對人的な會話に現はれるものである。即ちわれわれは、比較的平等であるとは云へ、やはり上下・貴賤・貧富の差別ある今日の社會に於いては、德望・才能・年齢・地位などの點で敬意を表すべき人には、常に敬意を籠めた態度で應答し、こゝに敬語が使用せられる。否政體上の理由で、社會的不平等が、病的に強制せられる場合を假想しても、德望・才能に對する尊敬の念の失はれる事は絶對にあるまい。德望・才能などがわからぬ未知の人に始めて接した場合に於いても、其の風采・服裝・態度により判斷し、尊敬はせないまでも、禮儀ある態度をとるのは、一般の現象である。同時に、見して自分より目下に感じるものに對しても、初めて見る時に「お前」の語を使用すると云ふ不作法な事は無下に無教養で傲慢な似

而非紳士以外には先づ無いと信ぜられる。とにかく眞に尊敬する場合、やゝ儀禮的な場合、内心では別段尊敬の價値を認めず、寧ろ輕蔑して居ながら敬意を表するのが有利であると打算して敬意を表する場合、など事情は様々にありはするだらうが、とにかく様々な人々に對して、敬愛の念の多寡に應じて、様々な程度の敬語をわれ／＼は日常使用してゐる。そして誰れも其れを怪しまぬ。

それのみか、敬語の使用を知らない時は、社會人としての世渡りが出来ぬ事を充分に確認して居る。實際社會の一員としての人間は、眞に無智・無教養であり、眞に無慾恬淡であり、榮辱に無關心である人間を除いては、敬語を知らない時には、世渡りは出来ないのである。禮を失した言葉で話しかけられる者は、よく／＼悟つた人で、よく其の話を理解して居る人で、も無ければ、必ずや不快に感ずるであらう。その不作法に覺悟するであらう。惡意ありと感じた時には無禮を怒るであらう。それ程でなくとも、その話しかける人間の無作法・無教養をうとましく思ひ、嘲笑侮蔑の念をいだく事もあらう。かの古今著聞集興言利口の部に

四條院崩御の時、醍醐大僧正の弟子何がし房とかや云ひける僧、大僧正のもとへ消息をやるとして「去九日、國王俄死去云々、尤不便之事歟」と書たりける、不思議なる文章なりかし。僧正腹腸を斷りて其の狀を見せられけるとなん。

とあるのは、第三者と坐す「國王」に關係した事だからこそ、滑稽談と成り得たもの、僧正自身に對する無禮の言であつたとすれば、僧正は憤怒したであらうと信ぜられる。

とにかく、禮を失した言葉は不快なものである。そして然う云ふ不快な經驗は程度の相異こそあれ、何人も味はう

た事があらうと思ふ。方言に對する知識が乏しくて、女中から「お前」の語を以て呼ばれて不愉快に感じたと思ふやうな例も多いだらう。(所によつては「お前」は最上の二人稱である。)

言葉は實に微妙なものである。無教養で下卑な言葉を常に使つて居る人間でさへも、其の貧弱な敬語の有無に關して感情を害し、暴行沙汰に及ぶ事もある。しかし自分の今説くのは、無教養階級に關した事では無く、教養階級に關した事である。

自分は今、敬語の使用を知らぬ人間は無教養に見られると言つたが、實際敬語としては此の點を重視すべきであると思ふ。**敬語**は他の國語の習得と同様に、他より教へられて習得するものにして、教へられざれば、敬意を表はさんと心では思つても、表現する事全く不可能のものなのである。従つて教養——但しこれは學問的教養と云ふ事のみを云ふのでは無い。一般の禮儀作法に關する教養の義と見ても支障が無い——の有無、其の教養の程度に正比例するものである。しかも敬語に關する教養と云ふ事は、他の知識の習得と性質を異にして——學識はあつても言語上の禮儀を心得ぬ者も居る——敬語に關する教養は、やがて其の人の品格の陶冶と關係するところへ云ひ得る位である。是れを碎いて云へば、敬語を知らない人間の下卑た物云ひは、その人までが、下品・野卑・劣等・無知・傲慢に見える、敬語を知つてゐる人は其の人までが上品・高尚・優美に見えると思ふのである。敬語の使用を知る人は、人を敬愛し乍ら、實は結果に於いて、自らを敬ひ、自らの品位を高めた事にも成つてゐるのである。

さて教養と云ふ場合には言語上の教養のみの事もあらうが、概して他の方面の教養も伴ふものである。これ、一般に言へば、下級社會に於けるよりも上流社會に於いて、無教養階級よりも知識階級に於いて、田舎よりも都市に於いて



て、敬語の使用の多い所以である事を認めねばならぬ。敬語を全く使用せぬと云ふ人間は先づあるまい。田舎人や所謂下層民の間には、敬語の使はれる事が確かに少いやうだが、彼れらの社會が標準語によりて代表せられる普通の言語社會に比べては、敬語の使用の必要が無いのと、教養の低いのと、使用する機會が少いのとに據るのであつて、彼等が敬語意識に缺けて居るとか、敬語を全く知らないと云ふのでは決してない。

とにかく敬語は教養に正比例するのが常だから、教養ある家庭にては、敬語を相互に使用する。親子の間にも敬語の使用があり、夫婦の間にも或る程度の敬語が使用せられる。しかして教養の乏しいければ乏しい程敬語の使用は行はないのである。

要するに現在の標準日本語にては、敬語は甚だ優勢であり、會話の場合には、普通は缺く可からざるものと成つてゐる。

が過去の日本語に於いては何うであつたかと云ふに、一般の日本語の變遷と同様に、量と質とで大いに變遷があつた。普通に、上古は敬語が簡單で、時代が下り、中古になるにつれて複雑と成り、新しい敬語が生れ、新しい云ひまはし方が生れ、殊に近古より近世へかけての武家時代と成りて、封建制度の社會で主従關係が嚴重と成るに至つては、社會の反映として愈々複雑繁褥となり、其の結果代名詞が異狀な發達をとけ、候文の如き敬語の使用の夥しい文體を生み、さて明治時代に入り、社會の大變動ありし爲め、其の後次第に敬語の云ひまはしも、其れを使用する機會も減少して、以つて今日に及んで居ると云ふのが定説である。

敬語が明治以來衰へたと云ふのは、維新以來舊儀がすたれ、制度が變じ、「舊弊」が口にせられ、繁文褥禮が排斥せ

られ、四民平等、自由民權が説かれ、やがて自由主義や民主主義の如きが唱へられるなど、制度上・思想上の大變動があつたのによるのは云ふまでも無い。其の敬語の少減と云へば、三人稱に關する敬語が甚だしく減少した事であつて、先づ從來の封建制度の社會ならば、微々たる官僚輩にも敬語を使用せなければならなかつたものが、次第に減少し、やがて現在の如くに消滅してゐる。又排佛毀釋や、物質文明による信仰の破壊につれて、佛教關係の敬語が失せ、それに伴ひ八百萬の神々に對する敬語の使用も減少し、三人稱敬語としては、殆んど皇室皇族や、社格の高き神社のみに限らるゝやうに成つたからの事である。時の流れと云ふものは恐ろしいもので、斯くまでも敬語を押し流したが、皇室皇族關係の事項のみに關しては、然うでは無かつた。これこそは注意すべき日本精神の現れであらう。因みに山田博士は、現在の普通文（希云自分はこの小篇では文）に於いて、敬語の貧弱に成りし現象につき、其の原因を論じ、「今日の普通文はその骨子とする處は、漢文讀み下しの體にあるべし……ここに於いて考へらるることは、かの漢文には、體言特に名詞の上には、敬語の發達頗る著しきものあるを見れど、用言には殆どその發達の見るべきものなきのみならず、本來單綴語たるかれらの語には、活用語の上にあらはるる敬語の如きは、全然なしといふを得べし。かくの如き漢文の、讀下し體に基づける往時の漢文書生の假名交り文は、用言の敬語を用ゐること殆どなかりしが如し。かゝる文に基礎を置ける普通文に、敬語の貧弱なるは、蓋し自然の勢なりともいふべきなり。然れども日本人としては、さすがに敬語を用ゐざるを得ずして、こゝにその敬語は最低限として、皇室に對してのみ用ゐらるるに至りしものの如し」（敬語法の研究 四〇四頁）と云はれたが、これは注意すべきであつて、古くは「子ノノタマハク」と訓んだものを、徳川時代の國語を知らぬ儒者共が「子イハク」と訓みはじめて、その尊ぶ可き孔子を冒瀆したのと併せ考ふ可きであら

う。日尾前山訓點  
復古上二一丁

文語に於ける敬語の減少と共に、明治以後は、口語に於いても無論、繁文褥禮的な敬語は減少した。しかし未だ未だ優勢であつて「ドウゾオネガヒ申シアゲマス」「オ坊チャンハ御ミヤヲドウアソバシマシタノデイラツシヤイマスカ」式の二重三重の御丁寧な口語の敬語は日常普通に見るところである。そしてわれ／＼は、三人稱としては「某君」と書かれたものよりも「某氏」と書かれたものに敬意の濃厚なるを認め、遭難した軍用飛行機の記事に「三名無残の焼死」とある新聞記事を読み「三氏」と書かなかつた事を叱責非難する感情を有して居る。「一等卒」と云ふ類の呼稱を廢止して「一等兵」と改めた理由も實に此所に存するのである。

さて此の口語の敬語が簡潔を貴ぶが爲めに、最小限度に行はれて居るのは、階級を重視する軍隊内に於ける敬語であらう。

山田博士は、

明治維新以後……敬語はなほ依然として、一定の方式を以て行はれてゐるのみならず、口語の敬語法の如きは、かへりて候文の敬語法よりも實質上進歩し發達せること、本書に説く所の如きにあらずや。されば吾人はいふ。敬語は明治維新以後かへりて活潑の生命を得て復活せりと。そのかくいふ所以は、かの萬葉集及びその以前の文獻に傳ふる敬語の現象と、現代の口語の現象とが、共に活力に富み生氣に満ちて、一道の氣脈相通するものあるにかかはらず、候文乃至中古の雅文の敬語には、形成の整へる點はありとしても、生氣乏しかりしを以てなり。されば吾人は現代を以て敬語の衰期と目することなく、かへりて復古更新の盛時なりと目するものなり。かの敬

語の衰滅を説くが如きは、全然國語を知らざる徒の妄言のみ。(敬語法の研究五頁)

と云つて居られるものは敬服す可き高説である。

かくて現在に於ける敬語は、相手や第三者に對する敬意を示し、自らは謙遜する事を示すと云ふ敬語本來の意味で使用せられる以外に、其の本來の意味から分化した用法として、相手や第三者に對する禮讓精神とは無關係に「御飯」「御茶」と云ふ風に、自分の言葉使ひを上品ならしめ、丁寧に云ふ事を示すためにも使用せられ、(因みに、是れはの敬語の條の(三)に「尊卑に關せず、自己たると相手たるを問はず、事物・動作を呼稱する場合」とあるもの、事とは一致せないのである。文學辭典の此の(三)は用例から見ると、甚だいぶがしい説明である。なほ此の御飯御茶式の敬語に類するもの、中には、敬語も類々と使用せられると、敬語たる意義を失ふと云ふ法則通りに、敬語たる事の忘れられてしまつて居るおもちや「おしろい」の如きもある。)又言葉使ひに敬語が用ゐられると上品な物言ひと成り、其の人の教養ある事を示す事と成るので、意識的、無意識的に敬語は話者の教養人品を示す役目を果し(森鷗外博士の所謂「自ら尊敬して云ふ敬語……自家の紳士的地位のために、賤しむべきものに對して使ふ敬語」(敬語法の研究四頁所引))と云ふのも此の中に入れてよからう、或は上位のものが下位のものに對する言葉中の敬語としては、親愛の情を示す役目を成し(犬や猫に對し、子供が親愛の情を示す時にも、此の云ひ方をする。)又反對に、常に餘りに親愛なるために、お互ひに敬意を含む事少き言葉使ひをし乍ら、何かの事情で一方が威嚴を示す必要ある時にも用ひられ(獨逸語、佛語などにて、親子の間では Du Sie を使ひ乍ら、親が不氣嫌に叱る時などに Sie Vous を用ひるのもこれである。)又特種の場合だが「此の俺様が召し上りなさいますのだ」と云ふ風に、自らに對し敬語を使ふ事によりて、相手を愚弄する場合にも使用せられる事がある。

とまれ斯う云ふ風に、敬語は國語に於いて、上古より現代に至るまで、大いに變遷はしたけれど使用せられて居る

ものにて、其の敬語の本質は尊敬禮讓の精神に在る。

一體言語は、動物の鳴聲にも比すべき極めて不完全なものから、長年月の間に發達して、上古の口語と成つたのであるのと言ふまでも無い。しかしして理論上然う云ふ原始日本語に於いて、敬語が存したとは思はれず、次第に敬意を示す單語が發達し、敬意を含めぬ單語共を聯ねて、敬意を籠めた云ひまはしをするに至り、やがて上古の口語と成つたものであるだらうが（敬意を含んだ古代の單語の中には、其れを語原的に分析すると、敬意を含めぬ普通の單語に成るものがかなり存する事に於ても、上代には敬語のすくなくあつた事を考へてよいと思ふ）とにかく日本人は敬語を生んだ。そしてそれを發達せしめたのである。

ひるがへつて外國に於ける敬語は何うかと檢するに、程度の差こそはあれ、やはり存するのである。例を最近な歐洲語に取ると、現在の英語にも婉曲な敬意を示す云ひまはしはある。しかし代名詞 *you* に成ると本來は複數形にてやはり敬意を含んだものであつた事は、忘れられて居るやうである。獨逸語や佛語・伊太利語には *Au* と *Ma* への區別があり、従うて相當な敬語も存するのだが、無論日本語に比す可くも無い。古代英語や古代獨逸語、又古代佛語などに於ける敬語が、何のやうであつたかは全く知らぬが、（イ）彼らが敬語を有つて居らかつて、漸く今日の程度の敬語を發達させたとしても又（ロ）彼らが本來は敬語を有して居り乍ら次第に其れを捨て、行つてしまつたのであるとするにしても、何れにしても、敬語を世界無比と云はるゝ程度に發達せしめたわれ／＼とは、雲泥の相異があると言ふ可きだらう。ギリシャ語・ラテン語には殆んど敬語が無く、奴隸が主人に對して云ふ言葉も、主人が奴隸に對しての言葉も同じである。これは彼らが民主的であつたからだと言はれてゐる。東洋方面では、蒙古語・西藏語・マレイ語などには對稱代名詞に對等、對上の別がある。支那では、名詞代名詞にては敬語が大いに發達したが、用言

は是れに作はずして殆んど見る可きものが無い。だから上代日本人は漢文で書く場合にその敬語意識を満足させるために

池邊大宮治天下天皇、大御身勢賜時、歲次丙午年、召於大王天皇與太子而誓願賜、我大文御病太欲坐故、將造寺藥師像作仕奉詔、然當時崩賜、造不堪者、小治田大宮治天下大王天皇、及東宮聖王、大命受賜而歲次丁卯仕奉（池邊の大宮に天下知らしめし、天皇大御身勢はり給へりし時、歲次丙午の年に、大王天皇と太子とを召して誓願給ひしく、我が大御病、太平に坐さむと欲す故に、寺を造り藥師の像を作り仕へ奉らむとす）と詔り給ひき。然れども當時崩給ひて造り堪へ給はざりければ、小治田の大宮に天下しらしめす大王天皇、また東宮聖王、大命受給はりて歲次丁卯に仕へ奉りき。

と書かねば承知できなかったのである。アイヌ語にも敬語はある。即ち複數形の轉用により又婉曲に云ひまはす事によりて示すのだが、婦人の間には、自分の事に關しても、其れが尊位のものに關した事を含んで居ると云ふ場合には、自分らの事に對しても敬語を用ゐる事もあるのである。しかして、此の敬語は「雅語は素朴・簡古でさほどのことはいけれど、口語に於ては可なりにやかましくなつてゐる。最も發達してゐるのは、日高・膽振の地方で、北方方言には少くなる。樺太方言に至つては殆んど北海道古語同様稀薄になる」(金田一氏ユイカラの「研究」の二二六頁) 由である。アイヌ語の敬語が、時間的・空間的に、程度の相異を有して居るのは、興味ある事にして、樺太アイヌの敬語が、日高膽振地方のに比べて貧弱であるのは、敬語の發達が後れて居るのであるか、若しくは、敬語が失はれ來つたのであるかの何れかで無ければならない。

朝鮮語に於いては、人稱代名詞に敬語があり、名詞にも漢語名詞の借用があり、形容詞の終止態・動詞の云ひまはしには、助辭・助動詞の助けにより對等・對上・對下の三種ありて

註、一例を舉げると

(1) po a ra 見よ(對下語)

(2) po o 見給へ(對等語の低きもの)

(3) po si yo 見なさい(對等語の高きもの)

(4) po sy si yo 御覽なさいませ(對上語)

の如きであつて、(3)は對上語としても使用せられ、(4)の下寧な云ひ方は、先づ普通は使用する事は無い由である。

敬語の使用がゆるがせに出来ない事は、國語に酷似して居ると云ひ得る。對等・對上・對下の三種の云ひまはし方に朝鮮の民族性を窺ひ得るのではあるまいか。(我が國には無論此の云ひまはしは存する。我が國に於いては、更らに、單語其

「痛まし」「對上」「氣の毒な」「對等」「か」「日本語と一番關係が親しくて、日本語同様にウラル・アルタイ系語に屬すると信

ぜられる。朝鮮語に敬語が多く、世界無比の敬語を有する。日本語と、日本程で無くとも、日本について敬語の多い朝

鮮語とが距離の接近した所に於いて相ひ似た民族の間に發達した事は、興味ある事であらう。此の他の民族に於いて

敬語が何のやうであるかは知らぬが、博識なる言語學者チエンバレンは「世の如何なる言語といへども、日本語より

多くの敬語を有するものなし」と云つて居るのである。日本語に比すべきは、地理的に接近し今はわが帝國の一部分

なる朝鮮語のみではあるまいか。

自分は以上述べた所により、歐洲語に於ける敬語に一寸言及したが、一體歐洲語と云ふと、概して性・數・時などを嚴重にし、動詞の活用 of the like も複雑なものがありて、日本人から見ると無用の事に煩はされ、惱まされて居るかの如くに見られるのだが、然う云ふ方面に關しては嚴重で敏感であるに拘らず、敬語には鈍感であると言はねばならぬ。日本人は人稱代名詞の使用は嚴重で無く、主語となる場合に省く事も多く、「手」と言ふ場合にも「私の」「あなたの」「あの人の」等と云ふ限定をする必要は無いのが普通であるのに對し、歐洲語では所有代名詞をつけて嚴重に自他を區別するのに、敬語に至りては鈍感であるやうだ。斯う云ふ相異は何に基くか。

日本の敬語を階級制度の遺物と罵倒し去るさかしらびとは、日本の社會に於いて階級制度が行はれて居た事、日本人が非民主主義的な民族であつたから、敬語も發生し、發達したとても云ふかは知らないが、不通の論であらう。

斯う云ふ論を認めるとすると、國語の敬語が、社會的權威者により案出せられ、其れが強制せられて、一般のもの、心ならずも不承々に、使用したとても云はねばならぬかのやうだが、言語の發達上然う言ふ事はとても考へられない。言語は自然の發達である。近頃でこそジャーナリズムの悪い作用により、國語が故らに破壊せられ、至められて行く傾向があるとは云へ、言語史では古代に溯れば溯る程、いよく自然發達であつた事を考へねばならないのだから、とても敬語が權威者により案出せられ、強制的に使用せられたのであつたなどとは思はれない。必ずや尊敬敬愛すべきものに對する尊敬の念の、内に醗酵する心持がありて、それが發露して獨りでに敬語と成つたのであらう。精神文化の貧弱な古代人としては、驚くべき獨創であつたと云ふ可きであらう。しかも、且敬語——其の萌芽とも云



ふべきか——が案出せられ出すと、日本人の心持によくあつたので、更らに次から次へと單語も出來、敬語の言ひまはしも多く生れたのであらう。要するに、敬語を生んだ古代人の心持は、貴ぶ可きものを貴ばうとするやむにやまれぬ感情の微妙な働きであつたに相異ないと考へられる。

しからば何故、又日本人發達史の何時頃より、日本人がさう云ふ感情を抱くに至つたか。是れは、敬語發生事情の本質に觸れる事にて、解決が至難であり、様々な解釋が可能である譯で、確かな事は決して明了できる可くも無いが、しかし恐らくは日本人の家族生活社會生活が原因であつたのではあるまいかと思ふ。ところで古代日本人の家族生活社會生活も亦實を云へば全く判らない。何れは人類發達の過程通りに、母子單位の家族より色々と發達して男系主義の複雑な家族と成つたものだらうが、しかし記・紀の記事や、奈良朝比の戸籍帳などから想像するに、かなり古くより、大體大家族制度にて、一家の中には家長ありて、其の下に大勢の家族が居り、それが家長を中心に秩序ある家を營み、祖先を尊び、親を尊び、長老を尊び、幼を憐み慈み、平和な團圓生活を營み、家長は又同じ血族の長（後の言葉で云へば氏の長と云ふ可きもの）とか豪族とか云ふものに隸屬し、それらの豪族らは、其れが又間接又は直接に天皇にお仕へ申し上げ、かくて天孫族國家に屬するものは、間接直接様々の程度の差こそはあれ、皆皇室を中心として秩序ある家族生活社會生活を營んで居たので、その秩序ある家族生活社會生活が言語意識に反映して、尊敬・禮讓の美風の發露たる敬語と成つたのであるまいか。しかして其の敬語の發生する根元は、家族生活であり、やがて其の敬語範圍が、家族生活から更らに廣い世界に及んだものであるに相違ないと思ふ。金田一氏はアイヌの敬語の有りのままの姿に就いて

敬稱は日本語にもあるが、アイヌの敬稱の使ひ方は餘程ちがつた所がある。どこでも社會の階級の上下で主としてそれが起るのであるが、アイヌでは、どの家も同じ生活で職業の差別のない四民平等の社會であつたから、この事は何等關係がなかつた。あるのは本家・分家・末家の差であつたが、それも敬稱の上には少しも關係がなかつた。敬稱の使はれるのは――

第一に、年下のものは年長に對して敬稱をつかふ。子は父に、小父に、これはどこでもあり得る事であるがアイヌでは殊にやかましい。

第二に、女子は男子に對して敬稱をつかふ。男子は女子に對して、目下のことばを用ゐる。我國などには、此も幾分あるけれど、尙同位置の間では婦人に丁寧なことを使ふものである。

それ故に女の子供は一等制が悪く、男子の年寄が一等制がよい。男兒は、青年期に入ると、もう子供あしらひを脱して、やはり、*tokunshi* (敬稱)を受ける。女子からは勿論であるが、僭叢からでも。そして一丁前になるに及んでは親からでも小父からでも、そこで *tokunshi* が始まるのである。

女子は生涯男子から *saingo* を受け、主婦が下男でも、母が母に向つても、惟が一丁前になつてからは *okunshi* を使はなければならない。

これだけならば、まだ以て少しも不思議とされないかも知れない。アイヌでは如上の習慣は絶對なもので、相手の目前にゐると居ないに關しないのである。蔭で噂をする時にでも、又目上の他人に向つて我が親の噂をする時にでも、親への *tokunshi* は割がれないのである。日本人のやうに、餘所の人に對しては、我が父を、おやち

たの「居る」だの「行く」だの言へないのである。我々の敬稱は、全く比較的であつて、相手次第では「父が來ます」よりも、もつと進んで「參ります」「うかがひます」まで下るのであるが、この事はアイヌには全く知れない習慣である。(ユイカラの研究二)

希云 *saralo* は金田一氏によると「呼びすて言葉」の義、*u-churushie* は「あなた様わたくしの詞つき」である。

尤も *pa-poro* (老年) といふことは、人間が神さびてゆくものと考へられるから、女子でも祖母になると、青年などが *okurushie* を使ふことが見聞される。反對に幼年者 (*hetatari*) 殊に嬰兒 (*pon-tation*) になると、大人は他家の人でも *setheo* を使ひ、その際には主従・雇傭の關係もない。さういふ氣持で生活して來たこの種族の人達は私の家へ來ても、よく私だちの子を「坊や」だの「そら來い」だの *setheo* である。それは必ずしも蔑視するのではなくして愛し親しむ心持である。

と云つて居られるが、此の女が男に、年少者が年長者に敬語を使ふと云ふ事は、よしや多少の相異のある事を假定するにしたところで、以て我が上代に於ける敬語の發生事情を考察する材料として可いのはあるまいか。父母に關した我が古代の敬語には

ち、の實の父のみこと、<sup>ベシバ</sup> 梓葉の母の母のみこと(萬十九の四一六四號、二つの四四〇八號)  
と云ふ風なものがあつたのである。

又アイヌ語では敬語の事を *okurushie* と云ひ「言葉尻へ陰を着けていふ義」で、呼び捨て言葉の *setheo* に對するのだが、其の *saralo* を日高地方では *unarietar* と云ふ。*unari* は増殖の義にして、年長から若き婦女や幼いもの

に(又親しい同士がお互に)、呼びすての詞遣をするのは、却て、どんどん増殖して行くやうに、さういふ短い詞遣をしてやるのだといふやうな心持から來た稱呼(「ユイカラの研究」(二の二一六頁)であると云ふ。斯う云ふ心持は對下語及び對等語に關するものであるとは云へ、對下語・對等語の存する事はやがて對上語の存在する理由でもあるから、國語の敬語の發生に關して、日高アイヌが *uwatkar* と云ふ言葉を生んだ心持をも亦、參考する必要があるだらう。

要するに、家族内に於ける敬語が土臺と成り、其の敬語の使用範圍が廣く及び、發達したものであらうと思ふ。

因みに前記の金田一氏は、アイヌ語の敬語の有りの儘の姿を述べて居られるのが、同時に又敬相の起原に關して敬稱のかういふ人々の間に喧しいのは殊に妻と夫との間に於て甚しい所から見ても、やはり女性の男性に對する Taboo から發したのがもとで、小兒は女性の手に育つによりて自然その語を習つて、婦人と子供は *matnusi* を使ふやうになり來つたものであらうといふ事を考へさせられるのである。(「ユイカラの研究」(二二三頁))

と言つて居られる。即ち夫婦單位の家族に於いて、女が男に對して敬語を使うたのが、アイヌ語敬語の起原であると言ふのであり、現在の如きアイヌの家族に於いて、老人達に對し敬語を使用したり、一般に女子が男子に對し敬語を使用したりするのは、アイヌ語敬語發生の根本義とは關係の無いものであると言ふ事になるらしい。

して見ると、此の解釋を古代日本人の間に於ける敬語の發生事情にも結びつけて、日本語の敬語の發生期も亦、夫婦單位の家族時代であつたと考へる事も可能となり、従つて自分が今言つたやうに祖父母・夫婦・兒孫を含めた家族の間に發生したと見るのは妥當でない事と成るやうだが、果して何うか。

アイヌの間では、男尊女卑の風が甚しいのは事實だが、然うかと云つて、其の敬語が夫婦單位の家族に於いて發生

したらうと考へる事が、先づ第一にかなり證明の難かしい事であるまいか。更らによしやアイヌ民族の間では然う言ふ事情で敬語が生れたとしても、日本民族に於いても亦然うであつたとは言へまいと思ふ。假りに一步を譲りて、アイヌ語に於ける敬語の發生に關する金田一氏の御説を認めて、日本語のそれにあてはめるにしても、後に祖父母・夫婦・兒孫を含む家族制度の行はる時代と成りて、一層敬語の發達が強められた事は、充分信する事出来るのである。とまれ、敬語が、何時、何のやうな事情で發生し發達したかは、到底説明できないとしても、とにかく、敬語を生んだのも、日本民族の民族性であり、敬語を生むやうな秩序ある家族生活・社會生活を形成したのも、日本民族の民族性であつたのであり、其の敬語を發達させたのも、日本民族精神であるのだ。武家時代と成つてからの敬語が、著しく發達したのも、要するに民族性と合致したからである。日本人は敬ふ可き人をキヤマヒ、自らをイヤシム事を心得て居たのである。

インドゲルマン民族も、古代にては大家族主義であつたと云ふ（金澤博士「言語の研究」と古代の文化」四三頁）そして彼らは程度の差はあるにしても、封建時代を通過して來て居り、皆最近までは君主政體を持續して居た國であり、又今でも君主政體を有して居る國であるのに、敬語に於いては、明らかに日本語に比して貧弱である。これは、西洋に於いて個人主義が行はれて居るのに考へ合せると、彼らが個人中心主義にして、日本人の如くに推讓發愛の精神に乏しく、よしや其の精神はあるにしても、それを言語にて表現するのに、鋭敏でなかつた事によると見るべきではあるまいか。

歐人は性・數・格・時などにつき煩鎖な規約ある言語を生み、發達せしめ乍ら、敬語を發達せしめず、家族主義の日本人は、性・數・格・時の如きには無貧若であり乍ら、敬愛の念に鋭敏にして、世界無比の敬語を發達せしめた。此の性狀

の相異に注目すべきである。神代より續く名家大伴氏の族長大伴家持は、一族の大伴古慈悲が罪に座したについて天平勝寶八年に

久方の、天の戸開き、高千穂の、縁に天降りし皇祖の、神の御代より櫛弓を、手振り持たし、眞鹿兒矢を手挟み添へて、大久米の、ますら健夫を、先きに立て、勅取り令負、山河を、岩根踏分みて、踏み通り、國覓しつゝ、暴威逞神を従け、服従へぬ、人をも懷柔し掃き清め、仕へ奉りて、秋津島、大倭の國の、根原の、敵傍の宮に、宮柱、太知り立て、天の下、治らしめしける、皇祖の、天の日繼と繼ぎて来る、列聖の御代御代隠さはぬ、清き心を、天皇邊に、窮め盡して、仕へ来る、祖先の職掌と言立て、授け給はる、生みの子の、彌繼ぎ繼ぎに、見る人の語り繼ぎでて、聞く人の龜鑑にせむを。惜しき、清き其の名ぞ、疎に、心思ひて、感言も、先祖の名斷つな。大伴の氏と名に負へるますら男の作。(萬葉二〇の四四六五號)

と云ふ有名な「嵯族歌」を作り、慷慨の口吻を以つて、大伴氏が神代より續く名家にして、明き心を天皇邊に極めつゝして、お仕へし來りし事情を説き、祖先の名や、大伴氏の一族名を汚すなかと訓喻し激勵した。此の皇室に對する誠忠の念、一族團結して家名を尊重する精神は全く大家族主義から生れたものにして、斯う云ふ制度は、程度の差こそあれ朝の、悠遠の古代にも存した事であつて、是れあるがために、日本特有の敬語も生れ、且つ發達したものであるに相異無い。

敬語は、現在では、吾人は皇室に關してのみ最大限度のものを使用するが、記・紀・萬葉に現はれた敬語も亦然うであらゆる敬意の窮極の點は皇室であらせられ、殊には至上至貴、明つ御神と坐す天皇にてましますと云ふ

のが、日本民族の宗教的とも云ふ可き大信念であつたのであり、又現在でも然うであり、未來永劫亦同じである可きものである。

其の明つ御神と坐す天皇は、御自身の御事を仰せらるるに當り、

○……ささなみ路を、すすくと、我が坐せばや、木輪の道に、逢はしし少女……逢はしし女……（記、應神帝御製）

○……天皇は、其事を聞かして、玉繩の胡床に立たし、倭文繩の胡床に立たし、猶待つと、我が坐せば、眞猪待つと、我が立たせば……（雄略紀四年八月、御製）

○胡床座の神の御手もち弾く琴に舞する少女常世にもがも（記、雄略御製）

○は國の、遠の御朝廷に、汝等が、斯くまかりなば、平けく、朕は遊ばむ、手抱きて、吾は坐さむ、天皇朕が、高貴の御手もち、掻き撫でぞ、勞き給ふ、打ち撫でぞ、勞き給ふ、歸り來む日、相飲まむ酒ぞ、此の豐御酒は（萬葉集六、九七三號。天平四年、聖武御製）

と御自身に對して敬語をお使ひ遊ばされたのである。（宣命には例が豊富だがこれは公式のものにて、歌に比しては別扱ひせなければならぬから省略す。）是れは「朕は現つ御神と座す至尊なるぞ」との御自覺をお示し遊ばされたものと拜察せられるのであるが、（尤も山田博士「敬語法の研究」〔四〇七頁には別の解釋見ゆ〕）其の天皇は又

○……神妻が、なごはさば……後妻が、なごはさば……（記、神武御製）

○難波人、鈴船執らせ、腰なつみ、其の船執らせ、大御船執れ（仁德紀三十年九月、御製）

○沖邊には、小船<sup>フナボネ</sup>連く、くろぎやの、まさづこ我妹、國へ下らす(記、仁徳御製)

と云ふ風に、身分低きものに對しても、敬語を御使用に成り、更に雄略天皇におかせられては

「<sup>フ</sup>籠もよ、御籠<sup>ミツ</sup>持ち、<sup>フ</sup>柵<sup>シ</sup>串もよ、御柵<sup>ミツ</sup>串持ち、此の岳<sup>ツタ</sup>に、菜摘<sup>ナツミ</sup>ます子、家聞<sup>イカ</sup>かな、名告<sup>ナツ</sup>らさね、そらみつやまとの

國は、押しなべて、朕<sup>ミコ</sup>こそ居れ、敷<sup>シ</sup>きなべて、朕<sup>ミコ</sup>こそ坐せ、朕<sup>ミコ</sup>こそは告<sup>ツ</sup>らめ、家をも名をも(萬葉集卷頭歌)

と云ふ風に、同じ一首の大御歌の中に於いて、御自らの事に對して「吾こそ坐せ」と仰せに成つて居るのに、他方では野に菜をつむ少女に對して「菜を摘ます子」と言ふ風に云つて居らせられる。是れは至尊至貴の帝王ではあらせられるが、さう云ふ少女にさへも、斯う云ふ云ひ方を遊されたのであつて、要するに少女に對する親愛の意を表現遊ばすために、斯う云ふ御言葉遣ひと成つたものである。斯う云ふ敬語は、本來は無論敬語ではあるが、實は親愛の意を表現するものであつて、此の種の用法は現在いよく盛んであつて、敬語の一用法となつてゐるのである。申すもかしこけれど、記紀により窺ひ奉る雄略天皇は、甚だはけしき御氣象の御方であらせられた御模子に拜察せられる。しかも同時に情熱的な、詩人的な他の反面をも持たせられたのであるが、然う云ふはけしき御氣象の至尊としては、菜つむ少女に對して話しかけ給ふ事だに——當時は然う云ふ事は、現在と比較すべくも無い位に簡便であつた事は考へられるとは云へ——畏きに、其の少女に對して、親しさのあふる、大御言葉をかはさせられて居る事に、一層の畏きを感じるのである。しかして此れは云ふまでも無く、敬語の使用があればこそである。敬語と云ふものが無かつたならば、天皇としても、其の大御心持を歌に於いて完全に適當にお示しに成る事もお出来にならなかつたらうし、千五百年近くも後のわれ／＼も亦、今のうつゝに天皇のおやさしき御心持を窺ひ奉る事は出来なかつたであらう。われ／＼



は日本人として、日本語に存する敬語に有難さを感じるのである。

敬語は右のやうなものである。然るに歐米の個人主義思想・自由主義思想・民主主義思想・社會主義思想などに比べて、日本精神に認識を缺くに至れる人々は、敬語を以て階級制度の遺物となし、輕侮し、其の自然消滅を説き、排斥をさへ口にするものもあるやうだが、餘りにも皮相の見であらう。社會の狀態の變化するに従ひ、禮儀作法・禮讓の精神も多少は變化して行き、敬語の消長もある事は否定出來ないが、是れが全く消滅してしまふなど、云ふ事は敬語を生み、敬語を發達させた日本人の民族精神から、敬愛禮讓の精神が消滅せざる限り、永久に消滅する事無きを私は信ずる。しかして、自分は、日本民族の間に存する敬語意識は、永久に消滅するもので無いと信じて居る。若し此の敬語の排斥破壊を積極的に意圖するものあらんか、それこそは、日本精神の破壊の意圖であつて、日本精神作興の現代精神と氷炭相容れず、社會に毒を流すものなる事は、思ひべき共產主義と全く同じであるとして、徹底的に排斥せなければならぬ。

註……山田孝雄博士は「文字言語の如きは……一舉にして根本的に之を改めむとするが如きは政治上の大革命に乗する場合の外には、夢想するに難しとする所なり」(假名遣の歴史九三頁)と云つて居られるが、正に其の通りであると信ずる。日本語中に於ける敬語を排せよと云ふ人あらば、其は、畢竟、皇室に對する敬意を捨てよと云ふ事に成るのである。想像するに恐る可き事である。しかも敬語を侮蔑する聲は時に耳にする所である。慨嘆に堪へない。

しかし現在の日本語は大亂脈を呈し居り、國がらとして口にするを思ひ可き「革命」の語さへ、日常の語として撒き

散らされて居り、思想界亦、不健實な歐米の思想を取り入れて多事である。われ／＼は戒心せなければならぬ。南朝の柱石として我が國體を闡明し、亂臣賊子輩をして畏怖せしめた北畠親房は

言語は君子の樞機なりと云へり。白地にも君をないがしろにし、人に傲る事は有る可からぬ事にこそ。先きに記し侍りし如く、堅き氷は霜を履むより至る習ひなれば、亂臣賊子と云ふ者は、其の始め、心言葉を慎まざるより出で来るなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにも有らず、草木の色の変更にもあらじ、人の心の惡しく成り行くを（末世とは云へるにや（流布本によ）りて引用す）

と云つて言葉を慎む可き事を説いたが、是れは至言であつて、現在の如くに、國語に對する愛護の念が缺乏し、思想が險惡と成つて居る場合に於いては、世の識者、爲政者たるもの、よく／＼此の正統記の文を服膺して、國語に對して多大の關心を持つやうにして、戒心して欲しいものである。

世界無比の敬語を發達せしめた日本人は、敬ふべき人をキヤマヒ、自らを禮儀の精神からイヤシム事は知つてゐるが、決して權勢に屈する卑屈の人間では無い。各人それ／＼の矜持は充分持つて居るが、推讓の精神から敬ひ、自らへり下るのである。従つて敬語には甚だしく敏感である。

然るに何ぞや、こゝに忌む可く慨嘆に堪へざる事がある。それは何かと云ふに、歐米の所謂先進國なるものに遊んだ連中が、歸朝して後に歐米の事を記し、又は物語るを吾人が讀んだり、聞いたりする場合に於いて、彼らが第二人称代名詞に關して不當なる用法を爲して、吾人を驚愕せしめる事即ちこれである。即ち彼等は歐米に於ける事を記し、又は語るに際し

「子供がお前は支那人かと私に尋ねたのでめんくらつた」

「自動車の運転手がお前の國の景氣は何うか。景氣が良いなら、俺を使用してくれるやう取はからつて呉れと云つた」

と云ふやうな奇怪なる物云ひをして毫も怪しまない風がある。しかも斯う云ふ變な云ひ方をするのは、外國に遊んだ人達全部の口癖ではなからうかと思ふに、屢々耳にし、又目に讀みて、不愉快に感ずるのである。一體我が國では人稱代名詞の敬語は、封建時代に於いて夥しい種類が使用せられたが、それは、話し手と聞き手との敬意の有無は、大部分、人稱代名詞に關するもので、人稱代名詞の使用に對して敏感であつたからである。しかしてそれは、明治以來急に減少したが第二人稱代名詞としては現在普通は、アナタ・アンタ・キミ・オマへ・キサマ（貴様）・ワレ（汝の義のもの）などが存し、其餘は敬卑の度合を異にし、話す人も語される人も、用語に注意して居り、誰しも「貴様」よりも「お前」「お前」よりも「アンタ」「アンタ」よりも「アナタ」の方が、敬意の籠る程度の濃いものと認めて居り、お前とアナタ・アンタ・君の使ひ方の誤用などは絶対に無い事である。それほどに標準語に於ける「お前」の語は、對稱代名詞として卑しいと成つて居る（但し隠岐などの方言で、「お前」が最上の敬語であるのは別である）。

ところで現在の社會では、外國に行くと言ふやうな人と云へば、先づ概して地位ある人、智識ある人にして、日本に於いて「お前」で話しかけられた場合には、佛然色をなさないまでも、不快に感ずるに相異なる人々であるが、其れらの人々が、外人より話しかけた對稱の言葉を、日本語に譯するに當りては「お前」の語に當てはめて居るのである。甚だいぶかしい事である。

歐米と云つても、英佛獨三國が主であるが、獨逸語や佛語には *Du du Sie vous* の別はある。まさか日本の紳士が *Dame* であしらはれる事はあるまい。(未知の異人より、家族待遇の親しさを示されたのだと見るならば別だが。) 次ぎに英語では *you* が元來は複數形として敬語であつたのが、今では敬意が失はれて居るも同然だから、アナタ・オマへの區別は無いと云つてよからう。然らば *you* を「お前」と解釋し自らを卑しくする必要も理由も無い譯である。(外國へ行く程の人間は、概して英獨佛語に素養もある人であり、これらの事情を知らぬとは云へない筈だ。) 假りに語感上「お前」と解釋せなければならなかつたと云ふのであるならば、其の場で言葉咎めしても可からう、何も日本へ歸つてまでも、異國で「お前」あしらひせられた事を、吹聴する必要は斷じてあるまい。

ところが外國へ遊んだ人々が日本へ歸ると、随分見識あるかの如く見える人であり乍ら、不見識にも「お前」あしらひせられたとして、自らを語る場合が甚だ多いのである。極端なる謙讓の美德の現はれか、歐米心酔の卑屈精神の現はれか、其の理由はこれを明らめる術もないが、われ／＼日本國土を離れた事の無いものは、斯う云ふ不見識な物言ひを、讀んだり聞いたりする毎に、日本人全體が然う云ふ不見識な言葉を吐く人により、恥かしめられ、馬鹿にせられたやうに感じ、大いに苦々しく思ふのである。謙讓の美德も程度がある。歐米心酔ならば言語道斷である。世界無比と云ふ日本語に存する敬語の本質を理解して欲しいものである。歐米に遊んだやうな人々は、異國に關して話す場合には、先づ第一に「敬語」敬語に於いては世界無比であると云ふ事、日本人は敬語に對して敏感であると云ふ事を充分認識した上で、見聞談を話してはしいと思ふのである。(昭和九年二月二十四日稿)